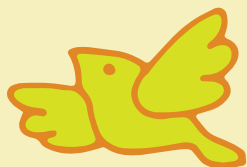




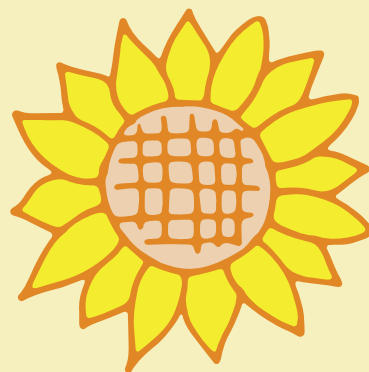
agriculture



farming

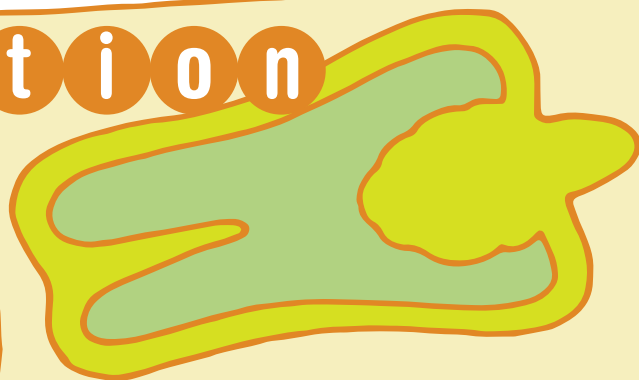
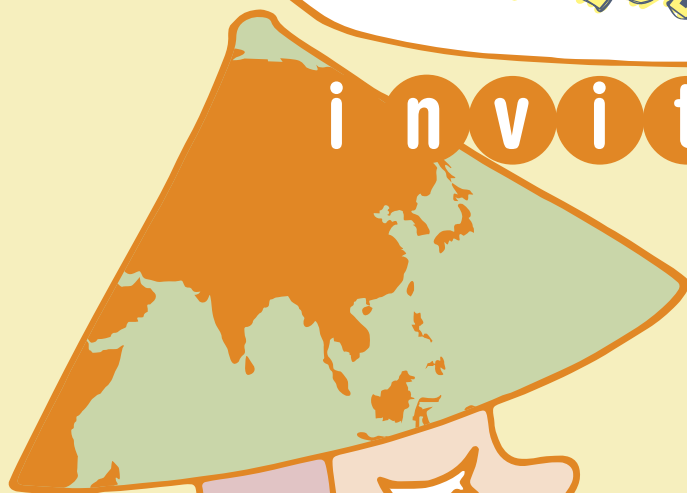


environment



農業・資源経済学 への招待

i n v i t a t i o n



economic development

history

food policy



東京大学農学部
農業・資源経済学専修

INDEX

農業・資源経済学専修のすすめ	1
農業・資源経済学の研究領域	2
農業・資源経済学専修の組織	4
農業・資源経済学の研究室	
農業経営学研究室	5
農政学研究室	5
農業史研究室	6
経済学研究室	6
食料・資源経済学研究室	7
農村開発金融研究室	7
農業・資源経済学専修のカリキュラム	
農村調査概論	8
農業・資源経済学演習	8
地域経済フィールドワーク実習	8
農作業実習	9
卒業論文	9
大学院	
大学院の概要	10
修士課程大学院生の生活	10
卒業後の進路	
進路状況	12
先輩の声	13



農業・資源経済学専修のすすめ

「直ぐ役に立つ人間は直ぐ役に立たなくなる人間だ」。慶応大学理工学部の前身、藤原工業大学の初代学部長をつとめた谷村豊太郎は、実業界の「直ぐ役に立つ人間を作ってもらいたい」との注文に対してこんな具合に応えたという。そのとおり、まことにもって至言である。私たち農経（農業・資源経済学は昔からこう呼ばれている）の気質にも、おおいに通じるところのあるアフォリズムである。

諸君が農経に進学したからといって、急にあざやかに変身し、たちどころにつぶしが利くようになるわけではない。そんなことを期待してもらってはこちらも困る。専門の勉強であるから、多少のテクニックは伝授する。けれども、テクニックはあくまでもテクニックであって、これを磨き上げるところに農経の本領があるわけではない。むしろ、つぎの三つのことがらを心がけていただきたいと思う。

ひとつは事実を深く観察する力である。農経における事実とは、すべてが人間の行動にかんする事実である。人間が人間を対象とする社会科学では、自然科学とは異なって、実験を行うことが困難である。ここが社会科学のむずかしいところである。けれども、人間が人間を対象にするのであるから、みずからの経験に照らして相手の心情の一端を汲み取ることはできる。エンパシーである。ここが社会科学としての農経の強みである。農家の庭先でうかがい知ることのできる生産者の表情は、しばしばよく吟味された統計数字以上に、農村の事実を伝えるものなのである。イギリスの農村であっても、タイの農村であっても、事情はまったく変わらない。

事実のなかにパラドックスを見つけだし、パラドックスを解き明かそうとする精神。これが心がけていただきたい二番目のことがらである。例えばこんなパラドックスがある。8億を超える飢餓と栄養不良の人々を救うために行われる食料の援助は、ときとしてその意図に反して農業不振という逆効果を生んでしまう。なぜであろうか。こうした問いをみずから探し出してもらいたい。そして、みずから真の解答を探し求めていただきたい。解き明かすべき大小さまざまなパラドックスがあるからこそ、農経は依然として知的な刺激にみちた分野であり続けている。

みずから解答を探し求めるといっても、無手勝流でははなはだ効率が悪い。効率が悪いだけならばまだしも、勝手な思い込みでもって珍妙な解決策を振り回されたのでは、相手だって迷惑だ。そこで第三に、考える道具としての経済学を学んでいただきたい。知識としての経済学の学習にとどまっていはいけない。エレガントな証明だけがとりえのような経済学も、残念ながら農経とは無縁である。現実の社会の問題を考えるための骨太な道具、考えた筋道を的確に表現する頑健な文法、これが私たちにとっての経済学である。

ともあれ、農経に進学したとしよう。そこから先の2年はなんといっても投資の2年である。一生をかけてじっくり収穫することのできる永年性の作物を、ひとつしっかり根付かせていただきたいものである。



農業・資源経済学の研究領域

農業・資源経済学と聞いて何を想像されるでしょうか？ 農業や自然環境は私たちの生活に様々な形で関わっており、農業・資源経済学が取り扱う分野は皆さんの想像以上に範囲が広いのです。また、国際化の進展や経済学自体の発展に伴い、農業・資源経済学のカバレッジは現在も広がり続けています。

農業は私たちの食料を生産する大切な役割を担う一方、自然環境や資源の適切な利用とも密接な関係を持っています。海外の国や地域に目を向けると、農業はそれぞれの社会に根ざしながら多くの人々の生活を支えています。とりわけ、開発途上国においては、農業を発展させることが、開発や貧困の問題に対する重要な課題となっています。人々の日々の生活をみつめ、農業に関する制度や政策が与える影響を理解し、複雑な経済の仕組みを明らかにする学問、それが農業・資源経済学なのです。

農業・資源経済学は応用経済学の範疇に入ります。しかし、単に机上の学問を用いるだけでなく、自らフィールドに立って新たな事実を発見し、それをアカデミックに解釈していくことが私たちの重視するアプローチです。現実に対する理解を基礎に、この学問分野のフロンティアを拡大していくことを目指しているのです。

農業政策・経済政策論

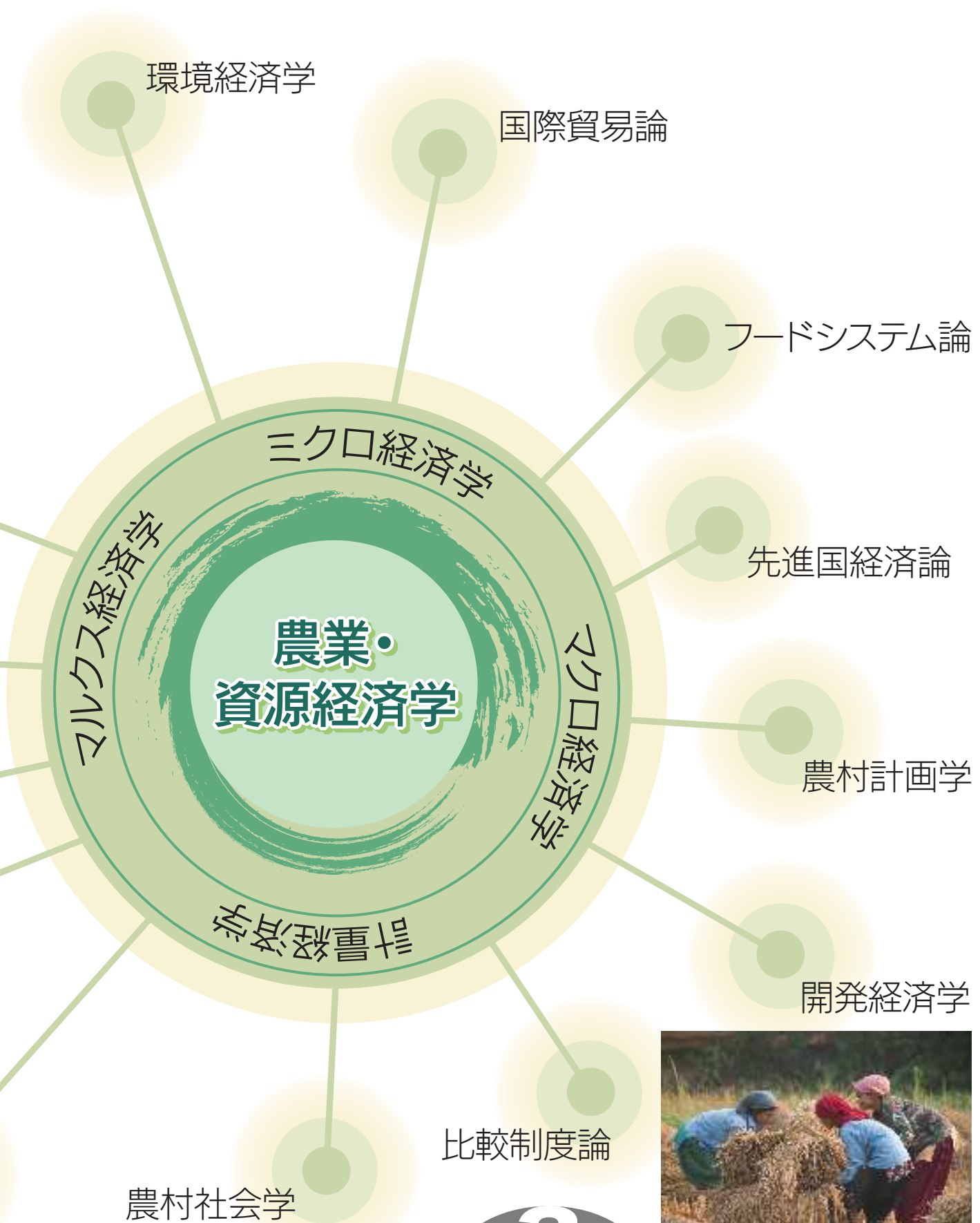
農業経営学

マーケティング

農業・農村金融論

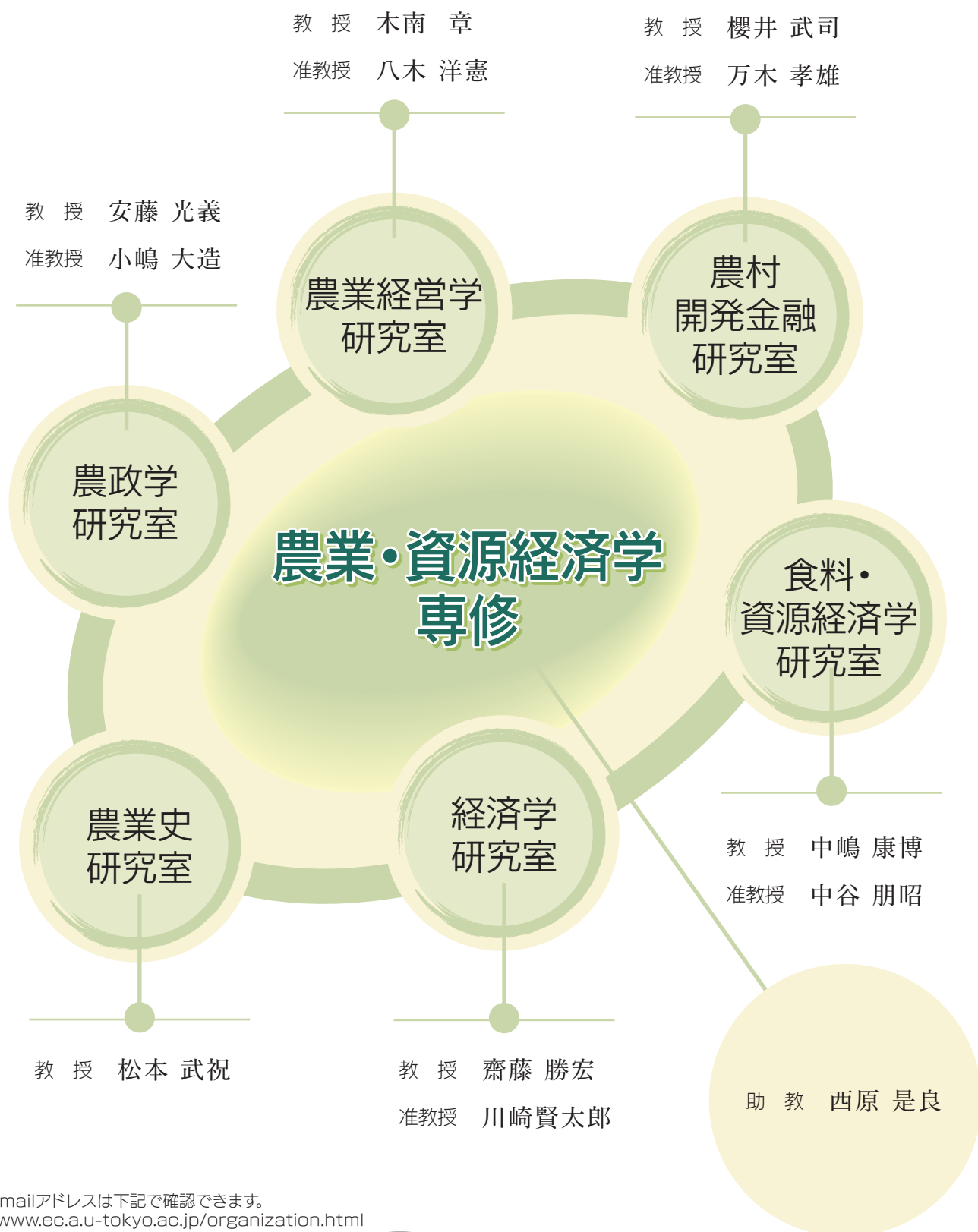
農業史・経済史





農業・資源経済学専修の組織

農業・資源経済学専修は、6つの研究室から構成されています。また、専修には助教がおり、普段の学生生活はもちろんのこと、卒業研究などにもきめ細かな対応を心がけています。



農業・資源経済学専修の研究室

農業経営学研究室 *Lab. of Farm Business Management and Rural Development*

木南 章（教授） Akira Kiminami

八木 洋憲（准教授） Hironori Yagi

当研究室では、農業および農業に関連するビジネス、それらを取り巻く地域（経済、社会、資源、環境など）をめぐる様々なマネジメントに関する問題について研究を行っています。研究のポイントは、いかにして社会・経済環境の変化に適応する戦略を策定し、戦略にふさわしい組織を計画・管理し、経済活動の持続可能性を実現するかという点にあります。経営学と経済学・社会学等の関連する学問の研究方法を用いながらフィールドワークに基づいた研究とそれを土台にした理論的研究を進めています。国内問題に限らず国際的な視野（農業経営の国際比較や途上国農村開発への貢献）を持ち、また、実践性（問題解決型のアプローチやケース・メソッドの導入）を意識した研究を心掛けています。



カリフォルニアの家族経営における稲の収穫作業風景。2台の大型機械によるチームワークで、作業を効率的に進めていく。

研究テーマ

- ・企業の農業経営の経営戦略とリスク・マネジメント
- ・農産物のブランド化とマーケティング
- ・途上国における農産物流通・加工ビジネス
- ・農業経営の人的資源管理
- ・地域農業のランドデザインと農業経営形態
- ・大都市圏における農地保全と農家の事業選択

農政学研究室

Lab. of Agricultural Structure and Policy

安藤 光義（教授） Mitsuyoshi Ando

小嶋 大造（准教授） Daizo Kojima

近代国家の形成以来、農業は政策と強い関係を持っています。資本主義国ではもちろん、旧社会主義国でもそうでした。それは何故でしょうか？ また、20世紀末から、WTO体制の発足、食料・農業分野でのグローバリゼーションの本格化により、世界的規模で農業・農村地域政策が刷新されています。それは何故でしょうか？ 農政学研究室では、こうした現代社会の根源的な問題と関わる課題の解明を進めています。その手法は、主に政治経済学的なアプローチによりますが、同時に地域ごとに様々な「顔」を持つ農業構造や地域社会構造の実態を的確に把握するために、濃密なフィールドワークを大切にします。

「ひとつの農家、ひとつのムラの現実から、世界の動きを見る」ことに挑戦しています。



英国の農村は市民が散策できるフットパスが整備されているが、その背景にはどのような歴史的・社会的背景があるのだろうか。英国の農村政策の特徴は何か。

研究テーマ

- ・農業政策の形成・変容過程
- ・外国農業と比較農政
- ・農業構造問題
- ・地方財政・農業財政
- ・農地制度論
- ・外国人農業労働者と移民制度

農業史研究室

Lab. of Agricultural History

松本 武祝（教授） Takenori Matsumoto

農業は、近代以前の時代から現代にいたる過程で急激な変化を遂げてきました。農村社会の人々も、その過程でさまざまな経験をしてきました。農業史研究は、そうした変化を追体験し、その時代を生きた人々の生産と生活そして心性を再現しようとする試みです。

その対象は、日本にとどまらずアジア・ヨーロッパなど世界に広がっています。幅広い時間と空間を対象とすることが、この研究の特徴となっています。

逆に、“今、此处に生きるあなたが、どうしてそんなことを研究するのか”という問いに常に晒されている研究分野でもあります。この難問に向き合いながら獲得した知見と洞察力は、現代という時代を理解するうえで多くの示唆を与えることでしょう。



大分県国東半島の農村景観。中世の田染荘（たしぶのしょう）以来の1,000年にわたる「土地に刻まれた歴史」が、現代に受け継がれている。

研究テーマ

- ・食文化の歴史
- ・環境と開発の歴史
- ・農村における家族・女性
- ・植民地朝鮮の農業問題
- ・近世近代日本朝鮮インドの比較農村社会論
- ・近世日本の農村社会と身分制

経済学研究室

Lab. of Agricultural and Development Economics

齋藤 勝宏（教授） Katsuhiro Saito
川崎賢太郎（准教授） Kentaro Kawasaki

世界経済は相互依存の度合いを強め、あらゆる事象が共有され互いに影響しあっています。ひとつの経済現象を分析するにも、経済理論はもちろんのこと背後にある相互関係やリンケージを念頭におく必要があります。経済学研究室では様々な経済現象とその変化を理論と実証で明らかにしていくことを研究課題としています。

具体的な研究課題としては、一国内における農村・農業部門と経済発展との関係、異なる発展段階における諸国間の国際的な相互依存関係、農業における労働と土地の調整問題、農業貿易の構造と政策、農業と環境に関する分析などですが、ミクロ的視点とマクロ的視点の両方を組み合わせ、現実問題を常に念頭において実証的に分析しています。



ビエンチャン（ラオス）のポンプ灌漑。ポンプ灌漑は乾季の稲作を可能にし、貧困緩和に重要な役割を果たしている。

研究テーマ

- ・農産物貿易およびGVCに関する経済分析
- ・農業・環境政策の経済分析
- ・気候変動と農業生産・農家所得
- ・農業生産性ショックと貧困・脆弱性
- ・家畜疫病発生の経済分析
- ・政策金融の経済分析

食料・資源経済学研究室

Lab. of Food and Resource Economics

中嶋 康博（教授） Yasuhiro Nakashima
中谷 朋昭（准教授） Tomoaki Nakatani

農業には大きな二つの役割があります。一つは私たちが生きていくために欠かすことのできない食料を生産すること。もう一つは私たちが快適に暮らす基礎となる水や土地などの環境と資源を管理することです。農業はGDPで測り尽くせない価値を私たちにもたらしています。

食料・資源経済学研究室は、この農業の役割に注目し続けながら、近代経済学の理論と手法をベースに、日本と世界の農業・食料問題から環境・資源問題までをカバーする幅広い研究・教育を行っています。さまざまな顔をもつ現代の農業問題を考えることで、私たちのウェイ・オブ・ライフの姿を描いていきたい。

研究室のモットーはwarm heart and cool headです。



耕して天に至る棚田（雲南省南部）

研究テーマ

- ・データに基づく食料・農業・農村政策の評価に関する研究
- ・食選択の二元論モデルの開発
- ・食品安全制度の経済分析
- ・産直と直売に関するオルタナティブフードシステム研究
- ・気候変動が農業生産に及ぼす影響に関する研究
- ・農業・農村の資源管理施策の効果測定に関する統計分析

農村開発金融研究室

Lab. of Rural Development Finance

櫻井 武司（教授） Takeshi Sakurai
万木 孝雄（准教授） Takao Yurugi

農村開発金融は、農村開発と農村金融というふたつの言葉を合わせたものです。農村開発とは、発展途上国の農村の経済発展を通じて農村家計の所得向上や生活改善を目的とします。開発のためには資金が必要です。そのため、農村金融に関する研究は、農村開発の研究に不可分のものになります。

農村開発金融の研究の対象は、主としてサブサハラ・アフリカや南アジアの現在の発展途上国です。それを日本や欧米が発展途上にあった時代にまで拡張して、比較経済発展史的な研究アプローチも志向しています。

研究の課題は、農村家計の生活水準（所得や消費、健康）に影響を与えるようなあらゆる事柄（例：農業生産技術、灌漑・道路・通信等のインフラ、農民組織、マイクロファイナンス、天候保険、森林資源、人的資源、教育制度など）が対象となります。



ザンビアの南部州、カリバ湖畔の村にて

研究テーマ

- ・開発途上国農村のリスクと貧困
- ・開発途上国における農業技術と農家所得
- ・開発途上国における農産物市場制度の効率性
- ・森林資源管理制度に関する比較経済発展史的研究
- ・農村金融に関する比較経済発展史的研究
- ・農民組織に関する比較経済発展史的研究

農業・資源経済学専修のカリキュラム

農業・資源経済学専修(農経)において卒業に必要な単位数は76単位です。その単位数を満たすために、農学総合科目、農学基礎科目、農学共通科目、課程専門科目、専修専門科目から指定された単位以上を取得する必要があります。一定の条件はありますが、農学展開科目や他学部科目を卒業単位として算入することができます。

専修専門科目と専攻に所属する教員が担当する課程専門科目が農経の学びの中心となります。とくに専修専門科目は専修の要ですので、以下で紹介していきます。



農村調査概論

農業・資源経済学を学ぶ上で要となるフィールドワークの方法論について習得する2年次A2タームに開講される必修科目であり、3年次に開講される地域経済フィールドワーク実習の概要を知る上でも重要な科目です。



農業・資源経済学演習

2年次のA1・A2ターム(演習Ⅰ)、3年次S1・SPターム(演習Ⅱ)、A1・A2ターム(演習Ⅲ)に開講される必修科目です。タームごとに4つのゼミが開講され、配属希望調査をもとに分属になります。つまり、関心のある内容について、10人未満という少人数でじっくりと学ぶことができます。セメスターごとに1つのゼミに所属することから、4年次の卒業論文の研究室決定前に、3名の先生のもとでゼミでの学びができることになります。これは、自分の関心テーマに沿った卒論の研究室選びや、卒論執筆そのものにも役立ちます。また学びを深めると同時に教員と親しめることも魅力の一つです。

ゼミの内容は、文献の輪読が中心ですが、フィールドワークや、農業経営者をお招きしての勉強会、他大学のゼミとのインゼミなどのアクティビティも取り込まれています。



地域経済フィールドワーク実習

3年次の通年で開講されている選択必修科目です。これは、戦前から行われている農村調査実習の流れをくむ農経の伝統授業で、農経の目玉授業でもあります。受講する学生一人ひとりが①関心に基づいてテーマを設定し、②調査票を作成し、③実際に現地での聞き取りを行い、④得られたデータを分析して、⑤報告書にまとめる、という一連の現地調査の流れを学ぶ実習です。

この授業では、何よりも、現地での聞き取りを行うことに特徴があります。実際の農業の現場で見る光景や、その場で聞くことができる現場の生産者、JAや役場などの職員の方などとの談話などからは、座学の授業だけでは得ることのできない視座や示唆、考え方を得ることができます。

そして、現地での聞き取りを中心として、事前の調査票設計、事後の分析・執筆という作業を、1年間をかけて行うという点にも特徴があります。つまり調査にあたって自身で設定したテーマで1年間をかけて報告書を執筆することになるのですが、これは卒業論文執筆のためのいい訓練となります。聞き取り内容に文献資料や自身の分析や考察を付け加えて書き上げた報告書の製本、そしてそれをもとにした現地での報告会、学生・教員の前での報告会というフィードバックの機会が得られることでさらなる学びにつなげていくことができます。また、この一連の実習においては教員3名のほかに、大学院生のTAが常にきめ細やか指導や助言にあたってくれるために、大変有意義な実習とすることができます。

農作業実習

3年次SPタームに1日、A1・A2タームに毎週、西東京市の生態調和農学機構(旧東大農場)で実際に農作業と体験する実習で、必修科目に設定されています。一見、「農業経済学」との関連は薄そうに見えますが、ともすれば「経済学」に追われがちな私たちに、土をさわり、モノをつくる喜びを感じさせてくれる授業です。水稻の育成から野菜・果樹の管理に至るまで、幅広く農業を体験することができ、さらにはレポートの作成や農家見学も行うことで、短期間ながらも農作業のエッセンスをつかむことができます。

卒業論文

4年次には卒論ゼミに配属され、卒業論文の執筆にあたることになります。

近年提出された卒業論文のタイトル

農業経営学研究室

- ・ 農業者の資金調達手段としての農業ファンドの課題と可能性
- ・ 加工用トマト国内契約産地の展開と国産原料不足への対応
- ・ 観光資源としてのりんご農園の経営特性と経営戦略—茨城県大子町を事例に—
- ・ 原子力災害後の風評に伴う市場の構造変化と農家の販売経路の選択—福島県産のモモを対象として—
- ・ 新規参入者の共同経営に関する実態分析—資本獲得経路及び経営者間の社会的相互関係より—
- ・ 農商工事業連携を活用した都市近郊型酪農の新たな取り組み—神奈川県伊勢原市における地域特産牛乳の商品化を事例に—

農政学研究室

- ・ 清酒業界の動向を踏まえた酒造の経営戦略と農業参入との関係について
- ・ 子ども食堂にとって来てほしい家庭の子どもが来るための要因の検証
- ・ ジビエ利活用の現状と課題—先進事例にみる6次産業化との比較から—
- ・ 集落営農の解散と農業構造変動—山形県酒田市の実態—
- ・ 都市近郊における農地保全の課題と展望
- ・ 超過作付慢性地域における転作対応の実態
- ・ スーパーL資金貸付の融資動向と地域性について

農業史研究室

- ・ 新渡戸稲造の農業論と教育論に関する研究
- ・ 日本のスナック菓子の消費需給に関する研究
- ・ 栄養成分表示の使い方の形成要因に関するSCAT分析法を用いた質的分析
- ・ 学校給食における地場産物使用の性質と実態—奈良県を事例として—
- ・ 現代における清酒メーカーの地酒観
- ・ 宮沢賢治の菜食思想
- ・ 近世後期の盛岡藩における社会的分業について
- ・ 肉食の環境への影響に関する認識と取り組み—ドイツ・アメリカ・日本を例として—

経済学研究室

- ・ 21世紀における民主主義と経済成長
- ・ 新型コロナウイルス感染症の拡大が日本の食品需要量にもたらす影響
- ・ 途上国における統計整備状況の観察と経済成長への貢献分析
- ・ 非対称モデルを用いたアフリカの穀物価格に対する国際穀物価格と国際原油価格による影響の分析
- ・ インドネシアにおけるパームオイル産業の役割とその影響—産業連関分析の手法を用いた経済・環境両面の分析—
- ・ インターネット広告の受容態度とその要因

食料・資源経済学研究室

- ・ 圃場別マイクロデータに基づいた中山間地域等直接支払制度下における土地利用実態の解明—岩手県盛岡市玉山地域における20年間の記録—
- ・ 中央拠点市場制度における新たな指定基準の検討—仙台市中央卸売市場を事例として—
- ・ 新型コロナウイルス感染症流行下における食品選択行動の変容過程—消費者購買履歴データを用いた食料支出の時系列分析—
- ・ 「食品ロス」をめぐる新聞記事の計量テキスト分析
- ・ 地域資源の保全管理に係る農村協働力の形成に関する分析—多面的機能支払交付金における推進活動とそのステップアップ過程に着目して—
- ・ ネットスーパーの進展とその意義—東京都の配送エリアの地理情報システム分析—
- ・ 食の二元論モデル開発に向けた食品信頼感の購買行動への影響の把握—ベスト・ワースト・スケーリングを用いて—

農村開発金融研究室

- ・ 非農業就業機会が水稻生産性に及ぼす影響—北陸4県の市町村パネルデータを用いた実証—
- ・ 原産地表示制度がワイン醸造と原料ブドウの生産に与えた影響—「山梨」ワイン表示に着目して—
- ・ 東京証券取引所の株式会社化に関する検証
- ・ マクロ・ミクロ両視点によるサバクトビバッタの影響分析
- ・ 気象の短期変動と子供の栄養状態—ザンビア農村地帯の高頻度データを用いた分析—
- ・ 発展途上国における施設配置の効率性に関する計量分析—マラウイの中等学校を対象として—
- ・ コメ先物市場における先物取引の気象リスクに対するリスクヘッジ

令和5年度までは研究室単位で卒論ゼミを開講しますが、令和6年度からは教員単位の開講に変更されます。

大学院

—農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻—



大学院の概要

大学院には、学部卒業後に進学する修士課程(2年)と修士課程修了後に進学する博士課程(3年)とがあります。

大学院において農業・資源経済学専攻に相当する組織は、農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻です。

大学院での研究は、各自それぞれの専門分野に特化した、さらに深いものとなってゆきます。オープンセミナーなど、研究室の枠を超えた専攻全体での議論も活発です。



修士課程大学院生の生活

修士課程の大学院生の入学から卒業までの大まかな流れとしては、まず修士1年次には講義主体のワークをこなしながら修士論文の研究テーマを決めることに専念します。大学院では、学部の頃に比べてより専門的で高度な知識を要求されます。したがって、多くの場合、1年目では、授業のある学期中は自分の専門や関心のある分野の授業をとり、研究のバックグラウンドとなる理論や知識の習得に努めます。また、この時、自分の専攻に限らず必要があれば他研究科の授業を履修します。実際、多くの院生が経済学研究科や公共政策大学院の授業を履修しています。夏休みや冬休みなどの長期休暇の期間には、適度に遊びながらも、論文を読んで研究を進めたり、先輩達と一緒に勉強会を開いたり、あまり研究や勉強から離れすぎないようにして過ごします。

2年次には、所属する研究室のゼミを中心として修士論文の執筆に本格的に取り組むことになります。農業・資源経済学専攻では、夏と秋に1回ずつ修士論文中間報告会があります。7月の中間報告会では、研究プロポーザルについて議論します。その後、国内外でのフィールドワークやデータの収集整理を進め、11月の中間報告会は、暫定的な分析結果や期待される結論などについて検討した後、修士論文の執筆にとりかかります。翌年1月中旬に論文を提出し、下旬には論文の審査を兼ねた修士論文報告会が開催されます。報告会では、先生方をはじめ先輩方からの質問や意見に対して適切に対応することが求められています。

上記のような基本的な流れに加えて、学部の講義や地域経済フィールドワーク実習のティーチングアシスタントを任される院生や、研究成果を学会で報告したり、論文に纏めて学会誌に投稿している院生もいます。

さらに研究を深めたい院生は、博士課程に進学し本格的な研究生活に入ります。

最近では、博士課程の学生を中心に経済的支援の体制も整いつつあります。

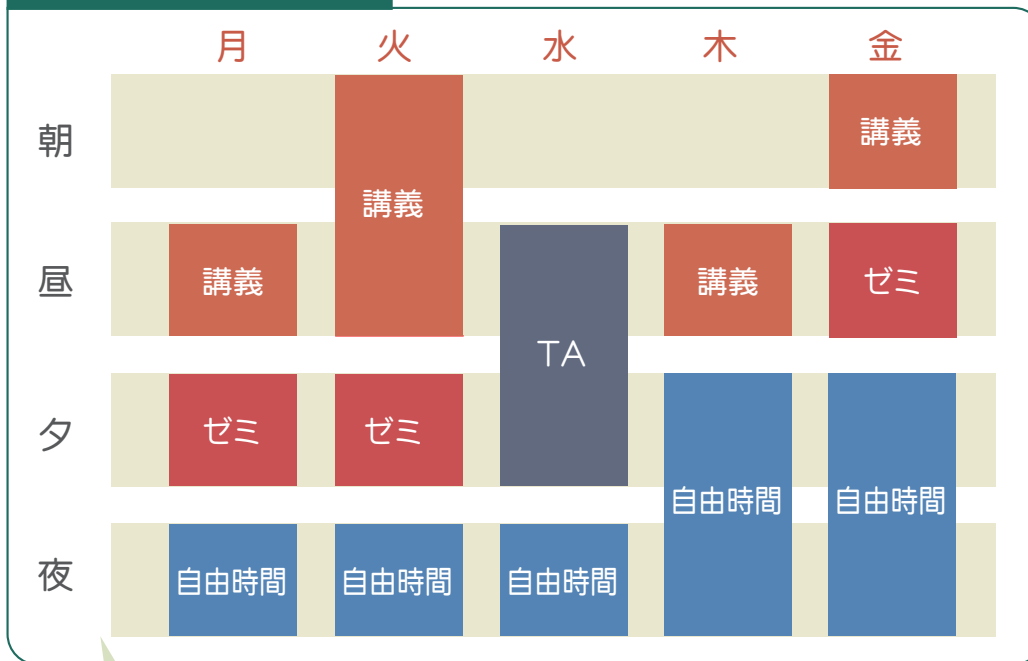


修士課程での研究成果を報告し、先生方や先輩たちからの質問内容について議論します。



大学院生の1週間のスケジュールを紹介します。

大学院生の1週間の生活(例)



講義の予習・復習や研究がメインですが、自由時間には大学のジムに通ったり、アルバイトをしたりするひともいます。院生同士で夕食を食べに行くことも多く、研究内容についての議論が白熱することもあります。



最近の修士論文リスト

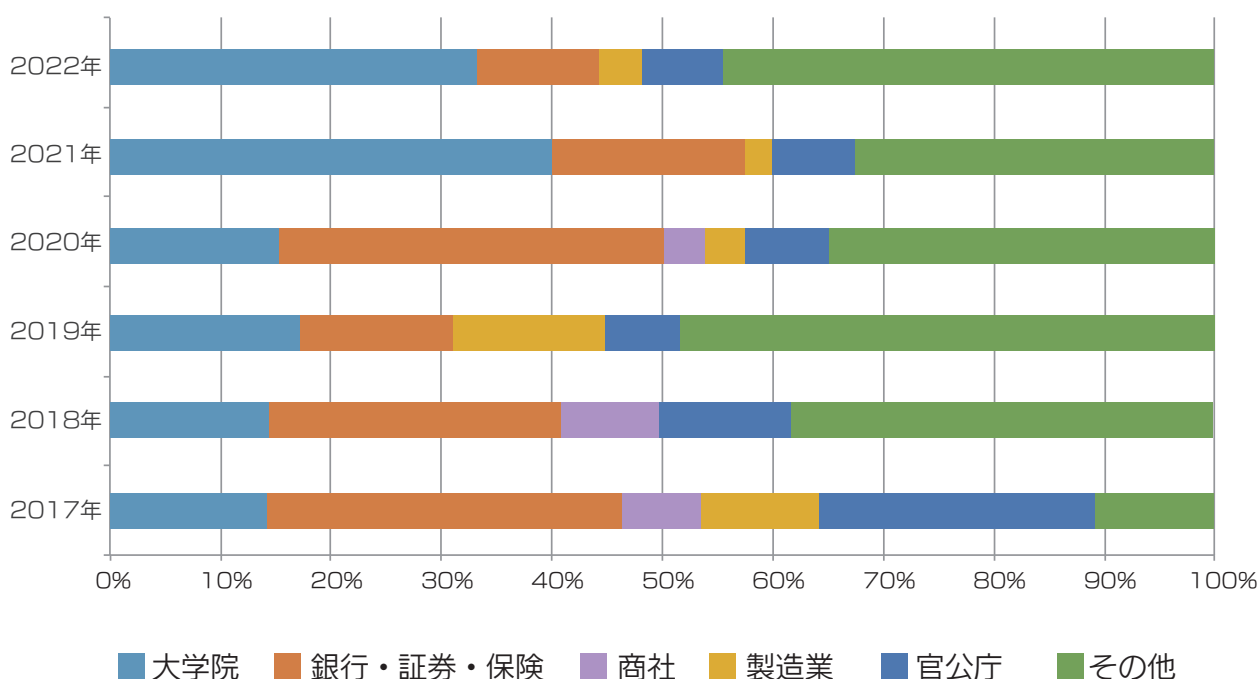
- Improving Rice Farmers' Productivity in Sub Saharan Africa: An Impact Evaluation of JICA's Intervention in Mwea Irrigation Scheme, Kenya
- Vegetable production and its impact on smallholder farmers' livelihoods: The case of the central highlands of Madagascar
- How did COVID-19 affect rural Myanmar? – Impact analysis using delinquency data of a microfinance institution –
- 市区町村間の所得格差とその形成要因
- Polygamy and Agricultural Efficiency: The case of Burkina Faso
- フードリテラシーの形成要因と食行動への影響
- 家計の食品ロスの発生要因に関する分析—消費者の属性や行動に着目して—
- Economic Impact Assessment of African Swine Fever on Farmer – Based on Analysis of Provincial Panel Data –
- 露地野菜の契約取引における生育予約システムの導入効果
- 外食が提供する価値に関する研究
- スマート農業普及過程における産地の役割



卒業後の進路

農業・資源経済学専修の卒業生の大半は就職していましたが、最近は農業・資源経済学専攻をはじめとする大学院進学も増えています。就職先は、金融関係、公官庁、商社、製造業、シンクタンクなど多岐にわたっています。毎年11月になると、3年生のための「就職セミナー」が4年生の手によって開催されています。4年生の体験談や就職活動の荒波を乗り越えるための知恵が語り継がれています。

進路状況



- 大学院進学
 農業・資源経済学専攻、農学国際専攻、経済学研究科、公共政策大学院、新領域創成科学研究科、工学系研究科、総合文化研究科。東大以外では、University of ReadingやUniversity of California Davisなど。
- 金融関係
 三井住友銀行、三菱UFJ銀行、三井住友信託銀行、農林中央金庫、信金中央金庫、みずほファイナンシャルグループ、ゴールドマンサックス証券、メリルリンチ日本証券、野村證券、日本生命、第一生命、住友生命、東京海上日動火災保険、かんぽ生命保険など。
- 商社
 丸紅、三菱商事、三井物産、住友商事など。
- 製造業
 キリン、サントリー食品、味の素、日清フーズ、日本たばこ、クボタ、三菱電機、花王、富士フイルム、トヨタ自動車、パナソニック、ソニー、帝人など。
- 官公庁
 農林水産省、経済産業省、厚生労働省、総務省、環境省、会計検査院、日本政策金融公庫、日本銀行、東京都庁、秋田県庁、名古屋市役所、警視庁など。
- その他
 全農、全国農業会議所、あいち知多農業協同組合、中部電力、電通、野村総合研究所、NTT東日本、楽天、アクセンチュア、A.T.カーニーなど。

先輩の声



農業・資源経済学専修に進学した動機は？

- ・食料問題に興味があり、農業について勉強しようと思った。
- ・フィールドワーク調査など、実態に基づいた経済が学べると考えたから。
- ・理系出身の自分でも、経済を学べるのは面白そうであると思ったから。
- ・文系学部に進学予定だったが、農業や環境への関心から農経の存在を知り進学を決めた。
- ・人の生命の根源となる「食」と「農」について学びたいと思ったことと、フィールドワーク実習に魅力を感じた。
- ・農業と経済の両方を学べると思ったから。



農業・資源経済学専修に進学して良かった点は？

- ・必修が少なく、履修する科目を自分のペースで組むことができる自由度の高さ。
- ・農作業の経験が出来た。
- ・文系から進学しても、溶け込みやすい環境だった。
- ・理系の学科では学べない社会科学的な視点を学べた。
- ・卒業論文の現地調査で様々な人々と出会えたこと。



農業・資源経済学専修の雰囲気の特徴は？

- ・横とタテの繋がりが強く、アットホームな雰囲気。
- ・人数が小規模で親しみやすい。先生方との距離の近さ。
- ・自由で、各自の興味にそった勉強・活動をしているところ。
- ・バランス観があり、おだやか、のんびり、面白い。



地域経済フィールドワーク実習に参加した感想は？

- ・一番楽しかったのは農家に泊まって話し込んだことです。
- ・一連の作業を通し、世の中の問題をいかにして解明するかを学んだ。
- ・現場で実感を伴う学びができた。
- ・農経でこんなことを学んだ!と胸を張って言えるテーマがひとつ身についた。
- ・自分で現場に足を運んで実証分析するというプロセスの大切さを学んだ。



卒業論文作成によって身についたこと・成長したことは？

- ・忍耐力、思考力、論理力。
- ・一連の研究手法が身についた。
- ・毎日3時間睡眠でもやり抜く精神力。自信。
- ・スケジュール管理の大切さ。

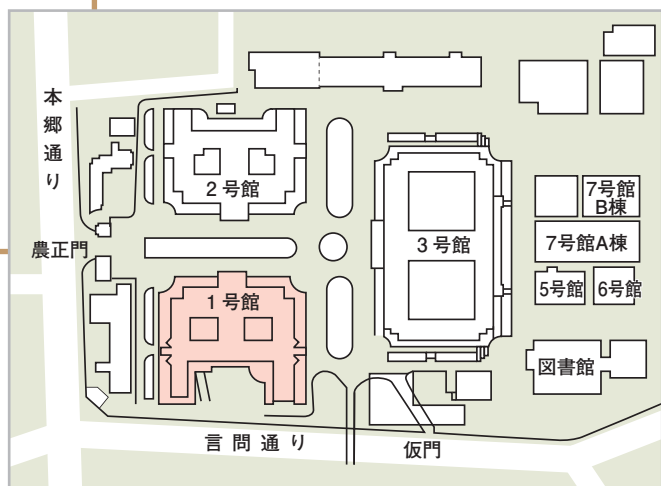
(平成26年度卒業論文報告会で行った3・4年生に対するアンケート調査から抜粋)



農業・資源経済学専修の窓から
世界の地域が見える



農学部弥生キャンパス



東京大学農学部 農業・資源経済学専修
東京都文京区弥生1-1-1 農学部1号館

<http://www.ec.a.u-tokyo.ac.jp/>